

# 岐阜県石徹白川水系における遊漁資源管理： 釣り人アンケートにもとづく考察

\*山本京佳・長崎佑弥・谷口義則（名城大・理工）

## 1. はじめに

遊漁資源を管理する内水面漁業協同組合は、組合員の高齢化や経営困難による漁業権の切り替え時の解散や合併が原因で漁協数と組合員数が共に減少している。また、漁協が管理する溪流魚は近年、河川環境の悪化や遊漁者による乱獲により繁殖能力が低下していた。これに対し漁協は養殖魚の放流で補い、それを遊漁者が利用し（持ち帰り）、漁業が再び養殖魚を放流することで従来の遊漁資源利用は成り立ってきた。しかし、これは野生魚減少の大きな原因の一つである。

このように漁協の赤字経営や溪流魚の減少が問題となっているなか、岐阜県の石徹白川漁協ではキャッチ&リリース区間（以下CR区間）の設置や養殖魚の放流の中止により、多くの野生イワナが生息し、人気の高い全国有数の溪流釣り場となった。本研究では、石徹白川漁協が遊漁資源利用に成功していると考え、対面式と記入式の二種類の遊漁者アンケート調査を行い、遊漁資源利用の実態と遊漁者の満足度等を明らかにすることを主たる目的とした。さらに、漁協の現組合長と前組合長にも聞き取り調査を行い、漁協の成り立ちの経緯やこれまでの活動等を明らかにすることを第2の目的とした。以上の結果をもとに遊漁者が満足する溪流魚資源の利用方法について考察する。

## 2. 方法

アンケート調査は、対面式と自己記入式の二種類の遊漁者アンケート調査を行った。2種類のアンケートの共通項目のデータは合わせて解析を行い、釣行年数4年以上の遊漁者を対象に釣獲尾数および体長それぞれが釣り満足度に及ぼす影響、共通質問事項の釣りの満足度の結果から、大満足と回答した遊漁者を対象とし、小型個体だが尾数が多かった遊漁者および尾数は少ないが大型個体

を釣った遊漁者の満足度の比較・解析した。

漁業協同組合への聞き取りについては、現組合長の佐々木茂氏と前組合長の石徹白隼人氏に実施した。

## 3. 結果・解析と考察

対面アンケートにより49人、自己記入式アンケートにより62人、合計111人の遊漁者から回答を得た。アンケートの結果、石徹白川での釣りの経験年数が4年以上の石徹白川を好んで繰り返し石徹白川を訪れるリピーターが多かった。また、CR区間を必要と考える遊漁者が多く、全体の満足度は非常に高かった。

大満足を選択した遊漁者を対象とし、釣獲尾数が多いが小型個体であった遊漁者の大満足数および少数だが大型個体を釣った遊漁者の大満足数を比較したところ、少数だが大型個体であった遊漁者の大満足数が86%と非常に多かった。以上の結果を元に、遊漁者は何に満足しているか順位を付けたところ1位は「よく釣れる」、2位は「魚が大きい」、3位「河川と周辺環境が良い」となり、石徹白川に釣りに来る遊漁者は石徹白川の遊漁資源に満足していることがわかった。

本研究の結果から、石徹白川では、CR区間で大きくきれい（野生魚）なイワナが釣れること、自然の豊かさにより気分よく快適に釣りができる等の釣り場の環境が維持されていること等から、近年高まっている“数より質”や“快適な釣り場”を求める遊漁者のニーズ<sup>12)</sup>に応えられる川であることが明らかになった。また、遊漁者自身もCR規則を理解し、受け入れることで、遊漁資源の維持に貢献できるよう努めていることも明らかにされた。これらのことが、石徹白川漁協が遊漁資源利用に成功している主たる理由であると考えられる。